憲法のこころを歌に!
平和のうたごえを列島中に鳴り響かせよう!

2025年　第58回
日本のうたごえ全国協議会総会

2025年2月23日（日）～24日（月・祝）

神戸国際会館　大会場

決　定　集

総会概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
私たちをとりまく情勢　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

２０２４年度　活動のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
①　青年のうたごえ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
②　歌をつくり広げる活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
③　合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典　・・・・・・・・　8
④　うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」　・・・・・・・・・・　9
⑤　学習・教育活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１０
⑥　組織建設・連帯活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１
⑦　事業・普及活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１
⑧　郷土のうたと踊り　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２
⑨　専門家及び他団体との協同連帯活動　・・・・・・・・・・・・　１２
⑩　国際交流　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２

２０２５年・活動方針　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３
おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６
２０２５年　主な日程・予定　・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６
２０２４年　表彰団体・個人一覧　・・・・・・・・・・・・・・・　１６
２０２４年　入退会団体一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・　１７

日本のうたごえ全国協議会
〒169-0072 東京都新宿区大久保２－１６－３６
TEL　03-3200-0106　FAX　03-3200-0193　E-MAIL　info@utagoe.gr.jp

総会概要

●参加者　代議員　１１０人（定数１５６）、評議員　３４人、オブザーバー　３７人、オンライン（オブ）１人、委任状３３通、事務局など　４人、総参加者　１８６人、○３１都道府県、○５産業別、　○１中央団体

●開会挨拶・総会運営体制提案　舟橋幹雄（評議員・愛知）

●総会運営体制

議事運営委員　◎舟橋幹雄（評議員・愛知）、田中嘉治（評議員・自治体）、轟志保子（評議員・東京）、三輪純永（評議員・うたごえ新聞社）、渡辺享則（評議員・長野）、大井かつ江（評議員・東京）

議長団　北林亜弓（評議員・大阪）、諸石義信（代議員・佐賀）、西本好道（評議員・兵庫）、樫木みゆき（代議員・兵庫）

選挙管理委員　加藤実（代議員・愛知）、加山忠（代議員・東京）

資格審査委員　朝倉久美子（評議員・兵庫）、伊藤常雄（代議員・長野）

書記団　◎三輪純永、椎橋亨

事務局　◎大井かつ江、杉浦幸子、掛川貞省（奈良・代議員）、椎橋亨（東京・代議員）

プロジェクター＆配信担当　時田裕二（京都・評議員）、髙畠賢（北海道・評議員）

●祝電・メッセージ　（順不同　２４団体）

全国労働組合総連合、日本国家公務員労働組合連合会、全日本教職員職員組合、全日本民主医療機関連合会、農民運動全国連合会、全国商工団体連合会、全国生活と健康を守る会連合会、全日本年金者組合、日本国民救援会中央本部、日本中国友好協会、日朝協会、明るい革新日本をめざす中央青年学生連絡会議、日本民主青年同盟、日本青年団協議会、新日本婦人の会中央本部、原水爆禁止日本協議会、平和・民主・革新の日本をめざす全国の会（革新懇）、日本婦人団体連合会、非核の政府を求める会、子どもの権利・教育・文化全国センター、全日本建設交運一般労働組合、詩人会議、あかつき印刷株式会社

●報告・提案

◇２０２４年度活動のまとめ　轟志保子

◇２０２５年度活動方針提案　田中嘉治

●討論　発言　３０人　　通告　３５件

●記念講演　野中宏樹さん（日本のうたごえ祭典ｉｎ佐賀実行委員長）

●財政報告　うたごえ新聞・三輪純永

季刊「日本のうたごえ」、全国協議会・大井かつ江

会計監査報告・羽鳥茂

●討論のまとめ　渡辺享則

●採択　代議員定数１５６人

方針案・まとめ、決算・予算　圧倒的多数で採択

●役員選挙

常任委員会推薦候補にたいし信任投票　全員が圧倒的多数で信任

※選出された新役員

会長・田中嘉治

副会長・北林亜弓、時田裕二、舟橋幹雄、三輪純永、渡辺享則

事務局長・轟志保子

事務局次長・大井かつ江
常任委員・青野一男、朝倉久美子、石川道彦、石垣潔、大堀直己、木村泉、河野好行、今正秀、斉藤智子、清水雅美、下温湯義和、杉浦幸子、高田龍治、田島由子、髙畠賢、竹澤まみ、土屋美和、堤龍輔、西本好道、八反田誠、藤村記一郎、松木郁子、松永朝恵、真船光子、間部友哉、武藤佳子、森川恵美子、山本惠造

会計監査・酒井紀子、羽鳥茂

●入・退会承認

●表彰

●新旧役員紹介と挨拶（各々※より挨拶）
新任・※大堀直己・田島由子（以上　常任委員）
退任・※桑田康徳・石垣正人（以上　常任委員）、広瀬紀代美（会計監査）

●閉会宣言　議長

第58回 日本のうたごえ全国協議会総会方針

はじめに

昨年11月29日～12月1日、佐賀で開催された2024日本のうたごえ祭典は3日間でのべ1万500人を集め、高らかにうたごえを響かせ大成功をおさめることができた。とりわけ、5年ぶりでの「アリーナでの大音楽会」開催を成功させるために、地元佐賀のうたごえは、日常のつながりに加え、新たな人々との結びつき、歌との出会いを創り出した。

祭典では、ストップオスプレイ・玄海原発、宝の海有明海を守る佐賀の三大闘争が歌い交わされたが佐賀のうたごえも、闘いに連帯するとともに、これまでにない三つの祭典活動に立ち上がり、そのことが団結の源泉となり、運動の原動力ともなっていった。その三つとは①協議会加盟を3団体から、うたごえ空白の「鹿島」「嬉野」にうたう会を定着させ、サークルをつくり、新婦人うたごえ小組も含めて3団体の加盟を増やし、倍化を実現したこと。②祭典成否のひとつのバロメーターでもあるうたごえ新聞読者を200人以上増やしたこと。③うたごえ人口が少ない中、県全体に7つの地域（青年）実行委員会をつくり、そこで歌い手組織、チケット普及、うたごえ新聞読者を広げる活動を総合的に取り組んできたこと。文字どおり歌って参加、広げて参加する「祭典運動の原点」といえる大普及活動で得た成果と教訓を力に、佐賀では次なる加盟をよびかけ、新たな前進に向けて奮闘している。

「うたごえ運動」は、３年後の２０２８年に創立８０周年を迎える。この８０周年を展望し、いまうたごえが求められているもの、将来の運動のあるべき方向を示す貴重な青写真として、「演奏・創造・普及・創作活動の旺盛な展開」、「組織建設・普及活動の強化」、「青年のうたごえの活性化」、「専門家・他団体との協力共同・連帯の強化」、「合唱発表会運動の活発化」、「日本のうたごえ祭典」、「うたごえ新聞読者拡大」、「出版事業の旺盛な展開」、「教育・学習活動の強化」、「郷土のうたと踊り活動の強化」、「国際交流の発展」、の１１の基本目標を柱に、総合的な活動計画を推進する「ビジョン」をどう描くかが命題となっている。

うたごえは、憲法９条、１３条（幸福追求権）、２１条（表現の自由）、２５条（生存権）の理念・精神を歌を通して実践している「歌う日本国憲法請負人」である。その憲法施行から７８年の今日、憲法のこころを「うた」に託し、国民的たたかいと結び、生活向上、民主主義、平和を守るうたごえを今年も一年全国津々浦々で展開していくことが求められている。

そして、うたごえ運動８０年となる２０２８年に向け、今年の神戸・ひょうご祭典を成功させ、来年の長野から大阪、そして東京（検討中）へと続く祭典の夢づくりを実現させることが何よりも重要になっている。自由と平和と希望の力を生み出す「うた」を高鳴らせ、夢と希望を広げながら、運動８０周年に向かう出発（たびだち）への大きな一歩を今総会から踏み出して行こう。

「五つの止」運動をさらに盛り上げる希望の年に

私たちをとりまく情勢

人為的な環境破壊と自然災害は年々エスカレートしている。核兵器廃絶とともに、いまや人類の大きな脅威になっている温暖化、自然災害などを引き起こしている「地球環境」問題は焦眉の急を告げている。国内においては、毎年方針に掲げている「五つの止」（戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、９条改憲政権に止め）は、今日、一層切実なものになっている。

核兵器と気候変動の危機を阻止する好機として

２０２５年は、人類存亡にかかわる二つの脅威である「核兵器と気候変動の危機」を阻止するため、人類の叡智を尽くし、次の世紀へと「豊かな地球環境」を引き継いでいくチャンス到来の年としたい。昨年、ノーベル平和賞を日本原水爆被害者団体協議会（被団協）が受賞したことや過去の過ちを忘れず、未来につなげていく被爆８０年を迎えたこと等により、その機運は高まっている。

この快挙ともいえる被団協の受賞により、石破首相との面会が実現。本年３月にニューヨーク国連本部で開かれる核兵器禁止条約第３回締約国会議へのオブザーバー参加を求めるも、首相は検討するとすら言わず明言を避けた。しかし、政府与党の公明党代表は、日本はオブザーバー参加するよう求めており、専門家からは、ノーベル平和賞が引き金となり、参加への議論が俎上に乗るのではないかと「半歩前進」との指摘も出されている。被爆８０年を機に日本政府に核禁条約への参加を求め、核兵器を廃絶させる運動をすすめていこう。

気候変動問題についても、世界約１９０の国・地域が温暖化対策を進めることに批准した「パリ協定」採択１０周年という、重要な節目の年を迎えている。新しい挑戦や変化を創り出し運動の発展を飛躍的に高める年として運動を興すことが求められている。

被災地への支援を強めよう

能登半島地震から１年が経過した。被災地の復旧・復興は、他の震災のときと比べても遅れが突出している。自治体による全壊家屋の解体撤去（公費解体）は、依然、全体の２５％しか進んでおらず、さらに９月

の集中豪雨により、かつてない複合災害となり、災害関連死が直接死の２２８人を上回る２５５人（１２月２４日現在）にのぼり、今後も増加の傾向にあることが深刻な問題となっている。

支援救助活動も「ボランティア元年」と言われた阪神淡路大震災から３０年経った今、大幅に減少している。自治体職員は大合併で削減されたうえ、過疎化や高齢化が進み、復興の担い手が減っている。この間、全国で起きた地震について発生後１年間のボランティア数を見ると、阪神・淡路はのべ１３７万人、東日本は１０２万人、能登半島は１６万人で、マンパワーが圧倒的に不足している。内閣府が実施した調査によると、ボランティアに行かない理由として４割を超える人が交通費や宿泊費といった金銭面を挙げている。自然災害が年々増加の一途をたどり、個人の善意だけに頼るのには限界があり、復旧・復興の遅れは、政治の責任にあることは言うまでもない。

大軍拡と９条改憲を許さない

被災地への財政支援なき冷たい政治とは真逆に、政府は２３～２７年度の防衛費の総額を４３兆円程度と定めており、２７年度には他省庁の防衛関連費も含めて国内総生産（ＧＤＰ）比２％の達成をめざしている。この目標は北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）の努力目標を参考にしたものであるが、トランプ米次期大統領の就任を前に、防衛費の再増額の動きが出てきており、ＮＡＴＯは３０年までに３％に引き上げる案をすでに検討している。一方で、トランプ氏は５％に引き上げるよう要求する意向だとの報道も見られる。

この間、自公政権は、集団的自衛権行使容認、専守防衛の放棄、敵基地攻撃能力保有など、戦後の歴代政権が憲法にもとづく「平和国家の理念」としてきたものを、ことごとく投げ捨ててきた。ついにそれは、次期戦闘機など殺傷兵器の輸出解禁にまで至る事態を迎えている。このことにより、石破政権が昨年末に閣議決定した２０２５年度の政府予算案は、初の８兆円超えとなる８・７兆円の大軍拡と大企業優遇を押し進める一方、社会保障を抑制する国民ないがしろの内容となった。今後、より一層の大軍拡・「戦争をする国づくり」及び改憲策動を進めようとしている石破政権に、ＮＯ！を突き付け、憲法９条を生かした政治への転換を強く求めていきたい。

原発再稼働と新設を許さない

２０２４年度中にも策定されるとみられる第７次エネルギー基本計画の原案で２０４０年の電源構成に占める原発の割合が２割と示された。現在１４基が再稼働しており、原発の割合は多くても１割弱。再稼働の審査申請中のものを含めても２割には届かないと言われている。原発新設を促進するとしても建設には２０年かかると言われており、到底４０年には間に合わない。ましてや地震の多い日本で新設などは許されない。何よりも原発を使い続けるという政府の姿勢を示したとしか言いようがない。

「先進国は３０年までに石炭火力の段階的廃止」を求めた国連決議に対して、日本だけがＧ７で唯一、石炭火力からの撤退期限を示しておらず、原発最大活用の計画に固執している。いまこそ、原発再稼働と新設をゆるさない声を一層大きくあげるとき。

沖縄から軍事基地をなくそう

日米地位協定上、米軍が負担することになっているのに日本が肩代わりしている米軍再編関係経費や「思いやり予算」（在日米軍駐留経費負担）等の諸経費も増額の一途をたどっている。普天間基地に代わる辺野古新基地建設には７３５億円を計上。新基地建設は計画よりも大幅に遅れ、経費も莫大に膨れ上がり、破綻しているにも関わらず、軟弱地盤が広がる大浦湾側の工事を民意を無視して進めている。そのうえに普天間基地の補修費も盛り込み、基地の固定化を目論んでおり、米国の言いなりで平和を脅かし、国民のいのちと暮らしを蔑ろにする大軍拡を断じて許してはならない。

今年に入り、またしても繰り返された米兵による性的暴行事件。地位協定の改定はおろか辺野古新基地反対の民意を乱暴に踏みにじる石破政

権に強く抗議するとともに、沖縄の地方自治を守り、沖縄から諸悪の根源となっている軍事基地をなくすため、新基地建設反対の声をうたや音楽で全国に広げることが重要になっている。

青年を迎え、ともにつくる運動を

先般の「裏金隠し」総選挙においては、若者の要求に特化した政策で国民民主党が議席を大きく伸ばした。その要因の一つとしてインターネットやＹｏｕＴｕｂｅの活用があり、多くの有権者の支持を得たと言われている。若者にとって、「手取り増」、「負担軽減」は切実な問題である。日本人口の６人に１人、約２千万人が貧困ライン（世帯年収１２７万円）以下での生活を余儀なくされているといわれており、とりわけ低賃金や非正規雇用の増大で若者たちの貧困化は深刻を極めている。いまこそ、教育、就労、生活に関する支援や改善が急務であり、青年の要求を実現できる政治の転換が求められている。

うたごえは、そのような社会に変える希望そのものを歌で広げる活動を全国で展開し、歌うことの楽しさと喜びを分かち合う魅力を持っている。その力を押し出し、青年を迎え入れるための呼びかけを旺盛にして、次代の運動の担い手となる多くの青年を迎え入れよう。

日本の合唱運動発展のために

コロナ期を経て、全国的な合唱人口という視点で見るとほぼ半減しているという数字が出ている。社会生活基本調査（総務省統計局）によれば、２０１６年には約３２３万人いた合唱人口が、２０２１年には約１８６万人にまで減少。その理由としてコロナで練習が出来ない等もあるが、大本には大学から合唱を始める層が激減していることが挙げられる（全日本合唱連盟広報委員会）。この傾向は中学・高校も同様で、合唱はその裾野を大幅に狭めている、というのが現状と分析している。

加えて、中学・高校では部活動の地域移行という荒波が始まろうとしており、学校から部活動が切り離され、学校の先生方の頑張りに依存していた部活動が今後どうなるのか。部活動を継続できる合唱団がどれほど残っていけるのか、正念場を迎えていると同委員会は指摘している。

うたごえにとっては、加盟団体数はコロナ期を経ても幸いにも増加の傾向にある。人口減少と高齢化の影響は避けられないが、運動理念をかかげて活動しているうたごえの仲間たちには、一人から一人へという大普及活動が無くてはならない活動になっており、そのことがサークル員、加盟団体、うたごえ新聞読者を総合的に絡め合いながら拡大することを日常活動の中で展開している「強み」がある。

文部科学省発行の「白書」には文化芸術振興の意義について以下のとおり記している。

「芸術、伝統芸能、生活文化、文化財などの文化芸術は、人々に楽しさや感動、精神的な安らぎや生きる喜びをもたらし、人生を豊かにするものです。また、（中略）他者に共感する心を通じて、他人を尊重し、考えを異にする人々と共に生きる資質をはぐくむものです」。

〝考えを異にする人々とも共に生きる〟これこそうたごえの特長であり、真髄ではないだろうか。大いにうたごえの信念を貫き、うたごえ仲間を迎え入れよう。

２０２４年度　活動のまとめ

［1］青年のうたごえ

〈方針１〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、青年が主役となれる活動を計画し、次代を担う青年を迎え、育てる。

青年のうたごえ祭典ｉｎＫＯＢＥの参加人数は８１名（全国６０名、兵庫２１名）となった。地元兵庫で青年の参加者をなかなか増やすことが

できなかったが、その中でも東播地域では和太鼓を習っている親子の参加、神戸では祭典の中で青年太鼓のステージを作り、その中から学生が数名青年のステージにも参加と和太鼓からの参加者が多かった。また、西宮では、合唱団員が子どもを誘って参加し、今まで見られなかったつながりを作ることができた。

日本のうたごえ祭典in佐賀では、保育との合同ステージで保育の方が青年のうたごえ祭典に参加、青年からも保育の交流会に参加するなど交流を持つことができた。地元佐賀の青年サークル〝ｍａｚｅｃｏｚｅ〟は青年祭典inＫＯＢＥ参加をきっかけに、お客さんという立場から日本のうたごえ祭典を開催する・迎える立場という気持ちに変化し、多くの青年を集め、全国の青年と一緒に歌うために知人や友人に一緒に歌おうと呼びかけ、歌い手を増やした。今後も新しい仲間を迎えつつ、協議会の加盟も視野に入れながら活動していきたいと思える祭典となった。

若者憲法集会への出演にあたり、全国青年で憲法集会の前に練習機会をつくり、本番に向かうことが出来た。佐賀での青年ステージや青年祭典で歌う曲をみんなで歌うことができ、全国青年からの参加が増え、事前練習にも取り組み、本番を迎えることができた。演奏曲は祭典の青年ステージでの演奏曲としたが、サークル・合唱団での練習がなかなかできず、個人で音取り練習をするメンバーもいたため、事前練習の時間を作ることで貴重な時間となった。また、ステージの練習をするだけにせず、今後、開催地東京・関東の青年の活動を活性化させ、仲間を増やしていきたいと思える機会となった。全国で新しい青年の仲間を迎える取り組みは難しい課題ではあるがいろいろな可能性がみえてきた。

［2］歌をつくり拡げる活動

〈方針２〉大軍拡を許さず、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、９条改憲政権に止めの「５つの止」実現のため市民共闘と連帯する。

〈方針３〉〝共に生きる町づくり、地域づくり、職場づくり〟のうたごえを活発に拡げる。

演奏普及活動

ロシアのウクライナ侵攻やめよ、ガザの停戦を求める反戦の街頭行動が前年に引き続き全国各地で旺盛に取り組まれた。能登被災地支援は現地への訪問や愛知のうたごえの支援チャリティーコンサート、大阪・コーラス・クラージョの支援ミニコンサート&うたう会の開催。また、現地石川のうたごえが被災地応援サマーフェスティバルに取り組むなど、復興を応援する企画が行われた。また、「ゾウ列車」が走って７５年の節目、各地でぞうれっしゃ合唱団の演奏が行われたほか、大阪で木下サーカス公演の中での演奏に２００人余参加、１０月愛知でのＰＴＡ東海北陸ブロック研究大会で１８０名の全曲演奏を行うなど大きな取り組みを成功させ、佐賀での演奏につなげた。

「５つの止め」の取り組み他

核兵器廃絶の取り組みでは、各地で日本原水協と共同の街頭行動が定着した。３・１ビキニデーでは地元静岡のうたごえはじめＴＰＮＷ参加メンバーを含めた５０名の合唱。平和行進では東京―広島コース通し行進者大村美恵さん（電通のうたごえ）が通過各地で平和コンサートを開催し、広島まで歌って核兵器廃絶をアピールした。原水爆禁止世界大会での演奏他、広島では８月６日、元安川で「広島　愛の川」を子どもたちとともに１００人の演奏。長崎では世界大会で「平和の旅へ」を演奏。また〈被爆者の声を世界に〉の企画で朗読に高校生が参加するなど若い世代との共同が行われた。日本被団協のノーベル平和賞受賞はうたごえにも大きな喜びと勇気をもたらし、平和公園ドーム前の祝うたう会（広島）、授賞式に田中重光さんを送り出す結団式で演奏（長崎）など、即時に対応した取り組みも行われた。

戦争反対、改憲阻止では、埼玉のうたごえが「戦争展」で公募含む１１０人のＰＥＡＣＥ合唱団演奏が実現、静岡のうたごえが焼津中央高校と合同演奏など、新しい拡がりを見せた。神奈川のうたごえはオスプレ

イ飛行再開反対厚木基地集会を行った。５・３憲法集会、東京ではゲストの古謝美佐子さん、ユキヒロさんとともに歌う〝みんなで歌う合唱隊〟を結成して文化行事で演奏。京都では円山音楽堂での集会にうたごえが文化行事として位置づけられた。６月の若者憲法集会（東京開催）には各地の青年が事前練習会から結集し、集会、パレードでうたごえを響かせた。市民団体との共同でのスタンディングも各地で回を重ね、函館トロイカ合唱団が市民有志の会の行動に参加し７月で７０回以上になるなど、うたごえの存在感を示している。

沖縄の辺野古新基地建設阻止などの取り組み、沖縄では浦崎直定さんがアコーディオンを持って反対の座り込みに参加。また、米兵による少女暴行事件抗議集会に沖縄のうたごえもかけつけた。ちばりょ～沖縄合唱団（大阪）は６月に与論島、石垣島へ、現地のお話を聞き学び、６・２３行動にも参加した。

原発阻止は、４月、合唱ミュージカル「バックトゥザ・フーちゃんⅡ」東京公演が行われ、福島の状況を都内で伝えるとともに、福島原告団の方々との絆を深めた。６月の「とめよう！原発依存社会への暴走大集会」（大阪）には福井のうたごえも参加し、大阪のうたごえと合同の演奏を行った。６・３０さらなる！志賀原発全国集会 in 金沢に福井と石川のうたごえが合同演奏。長野では３・１１福島東北を忘れない〝春を呼ぶコンサート〟、富山では〝大空へ飛べ〟が東日本大震災の教訓を伝える「命と向き合う教室」開催など、創意ある取り組みが見られた。

職場のうたごえは、「もう一人行進曲」が保育大集会やメーデーで押し出され保育士を増やす要求を発信した。各地のメーデーでは「サイチン音頭」も多くとりあげられ好評を得ている。宮城、大阪では「うたごえ不要論」も出る中で工夫してメーデー演奏を実現した。春闘の中では埼玉のうたごえが４組合を回る〝リレースト〟で工場内の労働者とともに歌った。ＪＡＬ争議団は本社大包囲行動に「勝利の朝を信じて」他を歌って参加した。

奈良で開催された全障研大会では奈良蟻の会合唱団、うたごえサークル九官鳥がテーマソングを作って参加し、大会を盛り上げた。愛知で行われた日本高齢者大会全体会オープニングでは県下の年金者組合やうたごえサークルで練習会に取り組み３００人の大合唱を実現した。

創作活動

５月、「これからこの歌を」オンライン発表会。３２の曲・詞の発表。自由交流も好評。福井の〝芝原五丁目夏祭りコンサート〟の映像と歌が参加者に大きな感動を与えた。さらに深めるため、具谷裕司さんをゲストに開いた８月のオンライン「創作おしゃべり会」は、地域に根ざし粘り強くうたごえ運動を展開する具谷さんの実践は創作の在り方に大きな示唆を与えた。７月に亡くなった福井の斉藤清巳さんについてオンライン「創作おしゃべり会～斉藤清巳さんを語ろう」で全国のメンバーが語り合った。たたかいの現場に深く寄り添う彼の創作活動やその姿勢におおいに学んだ。

日本のうたごえ祭典・オリジナルコンサートにはエントリー４７曲（昨年度４０曲）。今回、①聞き合うためにリハをなくし、②講評委員の野中宏樹さん、武義和さんも演奏参加、③斎藤清巳さん追悼のコーナーを企画、それらが大好評だった。武さんからは「感動的なコンサートになった」という感想とともに「来年は創作曲ゼロ地域からの参加を期待したい」と、要望も出されている。

保育、教育のうたごえではオンライン創作が進み、山形の「世界へつなげ米坂線」は大きな反響を巻き起こした。岡山合唱団の旺盛な創作活動、愛知の創作発表会では今年度３６曲の発表（創作曲集は５７曲）。能登支援は地元石川はじめ北陸、大阪、愛知など現地に出かけての歌づくりが行われ、創作部では能登への緊急のツアー、緊急のオンライン創作を呼びかけた。

創作センター　収集を目的とした創作センター第５回推薦曲は、２３年１１月より２４年８月までの登録作品全６７曲より３曲が選ばれた。保育、教育、および福井のうたごえの創作活動による曲が目立った。能登の地震に寄せる想い、教育現場の問題、佐賀祭典のテーマなど、全体に無理なく歌える曲が多い一方で、より想像力のある詞も求められた。

［3］合唱発表会運動、地域・分野、日本のうたごえ祭典

〈方針５〉地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画をもつ。

合唱発表会

各地、各産別の合唱発表会は、全国１０５９団体の参加で行われた。ようやくコロナ感染の影響から脱し、医療のうたごえも合唱交流を実現するなど、感染に注意しながら、全国各地で合唱発表会が戻ってきた。会員減や高齢化による参加辞退も起きているが、新たな集まり、歌いたい要求もあり、さらに幅広い参加運動が求められている。

全国合唱発表会本選は、コンクール部門、交流の部、オリジナルコンサート、計２８２団体の出場で行われた。参加枠の規定を見直したこともあり、前年度より２５団体増。出演人数は微減、また、女性、小編成、交流部門の参加は例年よりやや少なかった。前年北海道、今回佐賀という開催地の地理的影響も考えられるが、予選段階から「本選に選ばれても参加できない」と表明するなど、残念な現実も多く見られた。あらためて、日本のうたごえ祭典の開催意義、互いに高め合い、学び合い、切磋琢磨するねらいなどを再確認する必要がある。

総評では、「安定した合唱表現の団体がある一方、とびぬけて印象に残った団体は少なかった」「合唱団のメンバー一人ひとりの表現するための掘り下げるがもっともっと必要」との指摘もあった。指導者が自分のメッセージ性とそれを音楽表現として大勢の人に伝える方法にはまだまだ可能性があるとの提言もあった。また、互いの演奏を聴きあう努力、環境づくりも必要、運営上の工夫、そのための論議を進める必要もある。

若い人を合唱団に迎える努力、一緒に演奏する工夫、運動を今後につなげる大切さも強調されている。運営面では、出演団体の理解と協力のもと、要員の配置も新しい工夫を実施、負担の軽減と体制の強化を図った。要員の専業化、開催地の役割なども検討。新しい団体に積極的に呼びかけ、豊かな交流ができる合唱発表会運動の展開、未開催県をなくす連帯活動のさらなる取り組みが必要である。

地方祭典、産別祭典

今年度開催は、８府県７産別、１０地域、１分野で祭典および交流会が開催された。青年の祭典は兵庫の祭典と併せて開催。高校生や２０代青年も参加し、新たな出会いを拡げた。産別では７０年の歴史の電通のうたごえが６７回でファイナル祭典（東京）となったが運動は継続させていくことを確認しあった。医療（長野）は５年ぶりに対面開催を実現。広島＆国鉄のうたごえ祭典は中国５県の参加で行われた。教育（宮城）は宮城のうたごえ協議会と共催で音楽会を行い、〝Ｔｅａｍ大川未来を拓くネットワーク〟など青年層とのつながりも作った。産別祭典のあり方について深めていく必要がある。

２０２４日本のうたごえ祭典in佐賀

「青い空、緑の大地、豊かな海」をテーマに、１１月２９日特別音楽会、１２月１日大音楽会、１１月２９日、１２月１日合唱発表会、オリジナルコンサート併せてのべ１万５００人が集い、「小さな県の大きな挑戦」「伝説となる祭典」となった。地元の音楽家、佐賀の「三大訴訟」運動と結び、地元の特色を活かし、九州の連帯で成功させた。

［4］うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」

〈方針６〉運動の魅力と人間的魅力が満載されている〝うたごえ発ジャーナル〟としてうたごえ新聞を一層輝かせ歌の広がりとともに積極的に読者を広げる。

うたごえ新聞は、運動を進める指針として、特に２０２４年は佐賀での日本のうたごえ祭典成功を軸に、各地の活動と結んで編集・発行した。

全国からの通信は情勢と結んで、ロシアのウクライナ、イスラエルの

パレスチナ侵攻にＳＴＯＰ　ＷＡＲ、元旦に発災した能登半島地震復興支援、３・１１を忘れない東日本大震災の教訓、なくそう原発、政府の大軍拡を止め、憲法を活かす行動、日本被団協のノーベル平和賞受賞を祝う集いなどが届けられた。合わせて元イスラエル軍兵士・平和活動家のダニー・ネフセタイ氏、日本災害復興学会室崎益輝会長、東京・足友会山下和宏会長らへの取材。また、平和発信では高橋悠太、田中美穂、河野絵理子各氏の若い活動家等からの寄稿・取材。講習会レポートで創造を深める専門家から提言等を特集した。

〝読み〟〝作り〟〝広げる〟活動

《作る》（通信、企画提案）では、２０２４祭典 in 佐賀開催地からの佐賀の紹介、祭典企画・取り組みが企画提案含め精力的に寄せられたことがまず上げられる。毎号の「佐賀の風だより」、６つの地域と青年実行委員会から祭典づくり等で紙面からも祭典成功へ大きな力を発揮した。憲法、メーデー、戦争反対、核兵器禁止条約に日本政府の参加を求める活動からは街頭行動や集い、コンサート、うたう会、うたごえ喫茶の取り組み等。２０２４年の通信総数は１０７１件（合唱団機関紙誌、詩・曲含。佐賀からの送稿はこのカウント外）、全体数は前年比１８減だが、記事の送稿数は前年を上回った。

前年ブルーペン賞の藤村記一郎さん（愛知）は書く手も広げて、編集協力賞の箱崎作次さん（東京）も２０２４年も精力的に送稿された。能登半島地震では震災１カ月弱の時期に、石川の宮本喜久子さん（サークル花だいこん）から現状と「希望を失わず」と伝えた通信。自分たちでできることをと大阪から被災地に出向き、歌や話を聞く活動を伝えた小野寺芳子さん（吹田おらが町コンサート合唱団）の通信はうたごえ運動の原点をあらためて示した。静岡の青野一男さんの３・１ビキニデーレポートや高校生と活動を進める通信は特筆される。

機関紙誌は４３６件。毎週、運動の視点を示し、全団員が参画する関西合唱団「くれっせんど」、北海道合唱団「マルチャ」、福井センター合唱団「竜頭蛇尾」に加え、創作曲紹介含め毎号ボリュームある「満天星」（岐阜・中津川合唱団満天星）、大阪北部センター合唱団「はもらへん？」は団員一人ひとりの運動への思いも読ませる内容で注目される（記事は本紙にも紹介）。

《広げる》（読者拡大）

今年度読者拡大は全国３０都道府県で７２１人（２０２４年１２月２８日現在）。５月に組織活動者会議を開催（愛知）。読者拡大方針では「年間１加盟団体で３人」のお願い目標を提起。達成は、大阪、兵庫、佐賀の府県。また、２桁以上拡大は、埼玉、千葉、東京、神奈川、静岡、愛知、福井、京都、奈良、大阪、兵庫、佐賀。総会以後の基数比プラスの府県は、福島２、富山２、石川１、大阪２０、兵庫１４、大分１、熊本２。一方で前年比マイナスは１８道県。

大阪、東京、愛知ではニュースを定期的に発行し、毎月の協議会会議で現状と実践の交流が行われた。特に大阪では大阪の目標を念頭に全加盟団体から目標を出し合い、実践交流し、減紙を超えて大きく申請増。日本のうたごえ祭典開催地の佐賀、２０２５年の兵庫で祭典の取り組みと合わせて拡大が進んでいる。

５月の組織活動者会議での「無料お試しキャンペーン」は、その後全国に波及し、多くの成果が報告されている。団機関紙などで読みどころの紹介、例会、練習での読み合せ、投稿でより身近な新聞として活用が行われている。

季刊「日本のうたごえ」

№２０３～２０６を発行。各号のメイン企画は２０３「核兵器はなくせる」第２回核兵器禁止条約締約国会議の模様と２０２４祭典 in 佐賀にむけ、祭典メイン企画の一つ佐賀三大訴訟。２０４は総会特集号で全発言と記念講演「歌うこと、生きること、であうこと、繋がること」（野中宏樹、牧師、２０２４祭典実行委員長）の全文紹介。２０５は祭典 in 佐賀直前の発行。開催地の運動づくりと、荒木栄生誕１００年、祭典大音楽会〈今　蘇る荒木栄の歌たち〉プロに寄せてゆかりの人（浦田伊佐雄、山本忠生、祭典『地底のうた』指揮・高田龍治）の寄稿等。２０６は「ゾ

ウ列車が走って７５年」。合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」作曲者の藤村記一郎氏の寄稿「歴史を伝え、未来に平和のバトンをつなぐ」と各地の「ぞう…」―木下サーカス「ぞう…」公演（大分、広島、宮崎）―などで特集。この号は『『ぞう…』に取り組む人たちはみんな読まなきゃ」（東京）等、普及された。

毎号の詩人・石黒真知子さんの「ポエム＆エッセイ」、伴奏譜付楽譜掲載は好評。見本誌を活用し、定期購読増がひきつづき求められる。

［５］学習・教育活動

〈方針７〉演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受け継ぎ、発展させる学習・教育活動をすすめ、次代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

各地の主な教育活動

全国で、県・ブロックでの講習会、練習会等、祭典参加運動も視野に独自の創造教育活動が行われた。

京都では、府民音楽会で祭典曲の紹介や合同演奏、みんなで歌って佐賀に行こうと呼びかけ曲目を絞って練習会に取り組み、参加を広げた。また、各サークル・分野で公開練習で本番に臨んだ。京都の７５周年の取り組みを進め、特に次世代にバトンを渡していけるように新しいメンバーを指揮者・伴奏者に抜擢。

大阪では、関西合唱団の日曜講座に専門講師を招き、「リズム講座」を実施。大阪北部地域も講師を招いて合唱講習会、祭典に向けた合唱練習会、女性合同曲の練習会２回、職場・保育・青年の合同練習会も行った。また、平和を考える講演とうたごえのつどいにダニー・ネフセタイ氏を招き、地域合同演奏。

愛知では、要求に沿った〈まなぼ企画〉を開催。「アカペってみませんか？～アカペラ挑戦講座」には多くのグループやサークルが参加し好評。第３回となるスタッフ養成講座は地区の合唱発表会の準備の中で開催、「実際の舞台を知る」点からも得るものがあった。ひきつづき地区の合唱発表会の舞台監督ができる人を増やす。合唱講習会は祭典 in 佐賀に向けて山本高栄氏、長江真弥さんを講師に、発声、曲の成り立ち、リズムの感じ方などを楽しく学んだ。第３回小村公次氏の講演会、指揮者講習会も予定、他に伴奏者養成講座の要望が出ている。

東京では愛知の〈まなぼ企画〉に学んでの「合唱団練習見学」は絹の道合唱団の指導者横山琢哉氏の指導を見学、新鮮な学びになった。「誰もが歌える街頭行動講座」は３回実施、講座後に新宿６・９行動で即実践した。

長野では、県うたごえ学校夏の講座に祭典 in 佐賀と信濃のうたごえ祭典に向けての練習会に８０名が参加。信濃のうたごえ祭典は地元中心に４００人Ｔ＠ＸＹＴＤ成功、２０２６日本のうたごえ祭典長野開催の展望を開いた。新潟は合唱講習会を開き、オリジナル作品の合唱編曲を地元合唱指揮者で学んだ。

その他、北海道も全道講習会、九州は全九州講習会を実施、祭典 in 佐賀への弾みとした。

全国講習会

西日本は５月に福岡市で開催し、九州を中心に１３４名が参加。祭典合同曲を本番指揮者を含む幅広い講師で学び、大きな力になった。特別講座「荒木栄を語る」では荒木栄と共に活動した浦田伊佐雄さんから当時の話を聞いた。東日本も５月に東京と横浜で開催、１１０名が参加。祭典曲を新たな講師の指導で作品の魅力を学んだ。また、佐賀三大訴訟を歌う曲を取り上げ、祭典のイメージを深めた。

全国指揮・合唱指導講習会（教育講習会）は６月に松本で開催。３日間に約９０名が参加。合唱特別講座には講師に新実徳英氏を迎え、「つぶてソング第１集」全６曲を取り上げ、能登半島地震、また、東日本大震災の復興への想いをあらためて呼び起こす講習となった。指揮法特別講師の工藤俊幸氏からは「リパブリック讃歌」を学び、深い解釈で作品の魅力を引き出す講習に。特別指揮法、コース別指揮法の課題曲も祭典合

同曲を選曲、参加活動の一環とした。曲の分析、表現方法、指揮の必然性、具体的な提案など、歌い手としても貴重な学びの時間となった。

理論講座は、山本忠生さんより「時代と対峙した労働者作曲家　荒木栄」として、作品の想い出が多く語られ、アコーディオン伴奏で歌い、好評だった。

その他の教育活動

日本のうたごえ合唱団２０２４は、８５名の参加で新春合宿を行い、うたごえ運動にとって深い示唆を得る外山雄三作品を取り上げ、祭典 in 佐賀・特別音楽会で７５名で演奏。同２０２５もスタートした。

祭典 in 佐賀・大音楽会では〝青年と共に〟の意図で「その手の中に」が企画され、長野の信濃のうたごえ祭典でも〝若者と共に〟のステージに約８０名が参加し成功、若憲集会でのうたごえのステージ等、今後に繋がる行動となった。

［6］組織建設・連帯活動

〈方針８〉サークル・合唱団をつくるとともに協議会への加盟をよびかけ、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。空白県をなくすために、サークル加盟を積極的におしすすめる。地域ブロックの連帯活動を活発にする。

今年度の新加盟は、東京１、千葉１、富山１、京都１、兵庫１、長崎１の６団体。「入会のお誘い」案内も作成し、東京、千葉は長年活動しているサークルに加盟を呼びかけ、加盟に繋がった。富山は加盟団体を増やし、県協議会を結成。長崎は祭典 in 佐賀にむけ、郷土のサークルが加盟。兵庫も開催の２０２５祭典にむけ加盟団体を増やした。

会員拡大では、演奏会での市民団員や協力団員によびかけ、増やした団体も多数。また、コロナ禍後、歌いたいと会員が戻ってくる例も多数見られた。しかし高齢化やコロナ禍で活動休止の団体の退会等、会員数は昨年より減少。会員拡大は急務。関東、関西、九州は定期的に開催のブロック会議で諸課題に対応した活動を展開。東北ブロックもオンラインの活用で県の代表者会議を開催。職場のうたごえは現役が少なくなり、どう継承していくかが課題。このテーマでの常任委員を対象にした産別会議では、市民とともに運動を広げる視点が話し合われた。

年明け発生の能登地震被災地支援募金は、石川のうたごえ協議会、富山のうたごえ連絡会を通して被災地へ届けた。

［7］事業・普及活動

〈方針９〉うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開しよう。

「メーデー・平和歌集」は制作にあたり、広くリクエストを呼びかけ多くの反応があった。「もう一人行進曲」「全国一律！サイチン音頭」などを掲載し好評。埼玉うたごえ協議会では、県内の面識のない組合にも演奏やメーデー・平和歌集の案内を送る取り組みで普及数を伸ばすなど、全国的に前年を上回る部数を普及した。定例開催となっているオンラインでの事業普及部会で、事業物などの活用や普及状況など各地の経験・情報交流を力とした。うたごえの出版物として全国発信できる出版方法としてオンデマンド形式で制作・販売する「ＯＮＥＰＩＥＣＥ　ｆｏｒ　ＰＥＡＣＥ」を２３年よりスタートしたが、口コミでも広がりをみせた。例えば、宮城のうたごえ協議会では「こころのつばさ」普及のために、このシステムを活用し役立てた。

事業普及　協議会加盟団体で事業部担当をおき、活発に進める。事業普及部会も毎月１回開催が定着した。そこで出された事業普及の経験交流が普及の力となっている。より多くの担当者が参加できるよう工夫が必要。

楽譜のネット配信　音楽センター出版の音源はダウンロード販売を行っているが、中断している。楽譜のダウンロード販売は模索中。音楽セ

ンターＹｏｕＴｕｂｅチャンネルの活用もされている。

［８］郷土のうたと踊り

〈方針１０〉〝郷土のうたと踊り〟を旺盛に展開し、専門家との協力協同、全国講習会の充実、全国の活動の経験交流などを活発にする。

祭典 in 佐賀・大音楽会全国郷土合同曲「和太鼓・肥前鼓響」の講習会は、作調の野方嘉孝大和太鼓保存会会長を講師に東西で開催。東日本は６月に野方氏「肥前鼓響」、民族舞踏教育研究会代表園田洋一氏を講師に「エイサーガーエー」で開催し、７０名が参加。西日本も６月に野方氏「肥前鼓響」、民舞専科「萬祭（ばんざい）宮入踊り」を作者の塩原良氏を講師に開催し、３１名が参加。講習会を成功させ、祭典では大和太鼓保存会の協力で大音楽会のオープニングを飾った。また、東日本は９月の第２７回江戸やっこまつり（４１団体６００名参加）に、西日本は２０２４全国青年＆兵庫のうたごえ祭典に繋ぐとともに、２０２５祭典に向けて全国郷土合同曲「日本満開だんじり囃子」の短縮版を作者の塩原氏を講師に講習会を開催した。

調布狛江合唱団郷土部跳鼓舞、神戸市役所センター合唱団太鼓衆団輪田鼓、西播センター合唱団民謡集団鯱、静岡合唱団なかまの郷土部等は、合唱団の演奏会や地域のフェスティバル等に出演。また、次世代へ繋ぐ目標や技術の向上を目指して、団体独自で太鼓・民舞・篠笛教室や各種講習会も開催された。こうした活動の中で和太鼓・民舞の演奏が広がり、専門家との協力協同も進んだ。

「全国郷土センター（仮称）」ネットワークづくりでは、全国郷土部のＬｉｎｅグループで経験交流、動画等による情報交換が進んだ。

［９］専門家及び専門団体との協同連帯活動

〈方針１１〉専門家および他団体との情報交流、協力共同により音楽文化の豊かな発展をめざす。

講習会、２０２４日本のうたごえ祭典 in 佐賀企画などを通じ、指導、出演、合唱発表会講評など地元の音楽家、音楽団体などとのつながりを拡げた。

［１０］国際交流

〈方針１２〉アジアをはじめ世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる計画をもつ。

韓国との交流では、愛知・県民の手による平和を願う演劇の会が「ほうせん花Ⅲ」の光州公演を日韓の〝名古屋三菱朝鮮女子勤労挺身隊訴訟を支援する会〟により実現、６００人の観客を集めた。また、セウォル号惨事１０周忌追慕文化祭、済州島平和コンサートにいろそら！合唱団と山上茂典さんが参加。いろそら！合唱団は同団コンサートに〝青い松合唱団〟を招いて演奏交流も行った。埼玉合唱団は韓国の平和の木合唱団のコンサートに客演予定。中国との交流では日本紫金草合唱団が南京公演を計画中。

憲法のこころを歌に！　平和のうたごえを列島中に鳴り響かせよう！！

―被爆８０年から運動８０周年に向かう　創造・普及・組織活動強化となる―

２０２５年度・活動方針

方針〈１〉次代を担う青年を迎え、青年の要求に応じた音楽づくり、青年サークルづくり、青年が主役となる活動を積極的にすすめる。

①サークル・合唱団・協議会で、青年・学生とつながる活動や「学びの場」を意識的に持つ。

②仲間やサークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

③〝２０２５全国青年＆国鉄＆信濃のうたごえ祭典〟を青年のうたごえ活性化の場として、全国から青年を積極的に送り出し、２０２５日本のうたごえ祭典in神戸・ひょうごにつなげる。

方針〈２〉大軍拡を許さず、「５つの止」実現のため市民と連帯し、うたごえを広げる。

①憲法のこころを歌や音楽で広める。

②被爆８０年公募作品推薦曲を普及し、全国でも平和の歌を創り広める。

③「戦争法に終止符を！音楽人・団体の会」事務局体制の今後の活動のあり方について検討していく。

④辺野古新基地建設を断念させ、地位協定の抜本的な改定を求める沖縄県民のたたかいに連帯し、「沖縄を返せ！うたごえ大行動本部」を軸に全国で沖縄支援の取り組みを強め、「沖縄を返せ！うたごえ基金」に取り組む。

・創作曲や替え歌作りで連帯し、支援の輪を広げる。

⑤３０年を迎える阪神淡路大震災の教訓を忘れず、１４年を迎える東日本大震災及び未だ復旧・復興が遅れている能登半島地震被災地の支援を継続する。

⑥全ての原発の再稼働を許さず原発ゼロの社会をめざす歌をづくりと支援の輪を広げる。

⑦全国署名に連帯する。

・「日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」を全国で取り組む。

６・９行動はじめ全国各地で街頭宣伝等、歌や音楽で核兵器廃絶をアピールする。

・石破政権の大軍拡・大増税に反対し、「平和、いのち、くらしを壊す大軍拡、大増税に反対する請願署名」に取り組む。

方針〈３〉〝共に生きる町づくり、地域づくり・職場づくり〟のうたごえを活発に広げる。

①合唱・器楽・和太鼓・民舞等多種多様な形態でうたごえを広げ、平和で健康なうたを普及する。

・全市区町村で多彩なうたう会活動を展開し、創り歌い広げる普及活動を旺盛に展開する。

・全てのサークル・合唱団は職場にうたごえを届けサークルづくりの計画をもって実践する。

②全国各地で平和コンサートや地域原水協とも協力共同して平和うたう会等を開催し、平和行進、世界大会につなげていく。

③みんなで創り歌う運動を広げ、新しい創り手を生み出し創作活動と作品交流を活発にする。

・「全国創作センター」の周知徹底ならびに創作活動の旺盛な展開を図る。

・全国創作講習会を誰もが参加できる内容で成功させるとともに、全国各地でも講習会を開催する。

方針〈４〉合唱発表会を地方、産別、全国とも活発にし、学びあい、創造の高まりをめざす。

①合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏を聴き合い、講評を通じて交流し学び合う発表会の原点をいっそう輝かせる。

②参加団体を積極的に呼びかけるとともに、運営に工夫を凝らして豊かな交流ができる合唱発表会をつくる。

③合唱発表会参加団体を１６００団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

④合唱発表会の実施要領について小委員会をはじめとした検討をもつ。

方針〈５〉地方祭典の全都道府県開催をめざす

うたごえを起こし、つながりを広げ、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域や都道府県単位、産業別・階層別の祭典開催や交流を活発にし、祭典運動の前進をめざす。

方針〈６〉日本のうたごえ祭典を全国の力で多彩で豊かなものにし、長期開催計画を持つ。

日本のうたごえ祭典は、〝うたって参加〟参加者が演奏者であり、聴衆という特徴がある。祭典は単にサークル・合唱団交流の場ではなく、１年間の国民の生活とたたかいを音楽で歌い上げ、その運動の成果を反映するうたごえ運動の真髄となる行事であり、世界的にも例をみない音楽会である。日頃、少人数では構成できない「新たな音楽創造」が生まれる祭典に、全国からの演奏創造、組織普及を全力を挙げて取り組む。

①２０２５日本のうたごえ祭典 in 神戸・ひょうごを地元、全国の連帯で成功させる。

・２０２６年日本のうたごえ祭典 in 長野を１１月１３日（金）～１１月１５日（日）に開催する。

②祭典プロジェクトで運動８０周年以降の開催について検討する。

方針〈７〉〝うたごえ発ジャーナル〟としてのうたごえ新聞をいっそう輝かせ、歌の広がりとともに読者を常に意識的に広げる。

①〝読み、作り、広げる〟を合言葉に、紙面から運動の財産を学び、創造、組織、普及の力にし、２０２５年目標を見据えた各県の計画、方針を具体化する。本年度目標達成へ新読者の過去最高をめざす。

②規模の大小を問わず〝うた新を語るつどい〟などの全国展開を計画する。

③通信活動を活発にし、全国の活動経験を学びあう。

④うたごえ新聞創刊７０周年記念レセプション（７月１１日）を開催する。

⑤季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけを高め、積極的に活用し、会員の全員購読をめざす。新読者を５００人増やす。

方針〈８〉演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育活動をすすめ、次代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

①運動の歴史を引き継ぎ、日常の練習や活動の中で教育活動を重視する。批評活動や運動の理論学習をすすめ前進の力にしていく。

・うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」、「グレート・ラブ」、「うたごえは生きる力」、「関鑑子の夢を訪ねて」、対談集「池辺晋一郎の夢を見てますか」などを学習・教育活動に積極的に活用する。

②「教育テキスト」の改訂を検討する。

③各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。各協議会やブロック等で指揮者・指導者の交流を活発にし、そのネットワーク作りをすすめる。

④普及活動を旺盛に推し進めるため、オンライン、ＳＮＳを活用した取り組みを進め、新たな層へのうたごえ普及の力にする。

⑤サークル・合唱団・協議会の次代を担うリーダーづくりの計画をもつ。

⑥日本のうたごえ祭典の全国合同企画、「日本のうたごえ合唱団」への参加を強め、創造的連帯の前進をめざす。

方針〈９〉サークル・合唱団をつくるとともに協議会への加盟をよびかけ、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。空白県をなくすために、サークル加盟を積極的におしすすめる。地域ブロックの連帯活動を活発にする。

①サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やす。

②合唱発表会参加団体及び人数、協議会加盟団体を目標を持って計画的に増やしていく。加盟５００団体をめざす。

③協議会のない県の発足を計画的にすすめる。現在２団体が活動の県は今年度中の協議会結成をめざす。

④職場のうたごえの建設強化をはかる。

⑤２０２５年の全国組織活動・うたごえ新聞読者拡大会議を５月２４日（土）に愛知で開催する。

方針〈１０〉うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開しよう。

①普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画制作と旺盛な普及でうたごえの前進の力とする。

・６人の音楽家による７５周年記念作品集「スタートライン」、「関鑑子の夢を訪ねて」を普及する。

・「メーデー・平和歌集」など楽譜、文献、ＣＤなどを活用し、多くの人にうたごえを届け、闘いの大きなうねりをつくる。

・みんなうたう会、うたごえ喫茶の活性化やうたごえ普及のために、サークル　・合唱団の演奏活動と結んでＣＤ、楽譜などの出版、普及活動に努める。

②サークル・合唱団に事業部担当をおき、経験を交流し合い事業普及活動を活発に進める。

③楽譜のネット配信など、インターネットの活用などで事業普及の力にする。

④㈱音楽センターの安定した経営のための支援を検討する。

方針〈１１〉〝郷土のうたと踊り〟を旺盛に展開し、専門家との協力協同、全国講習会の充実、全国の活動の経験交流などを活発にする。

①東西郷土講習会を成功させる。

②全国の郷土活動、経験交流を活発にし、情報をうたごえ新聞に反映させる。

③専門家・保存会との協力関係をすすめる。

④「全国郷土センター（仮称）」ネットワークづくりを検討する。

方針〈１２〉専門家及び他団体との情報交流、協力共同により音楽文化の豊かな発展をめざそう

①東・西日本合唱講習会、指揮者・指導者講習会（長野・松本）を成功させる。

・各種合唱講習会、指揮者・指導者講習会など運動内外の専門家との協力共同を強め、うたごえの創造的力量を高める。

②平和・民主団体との交流、協同を強める。

方針〈１３〉アジアをはじめ世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる計画を持つ。

方針〈１４〉運動８０周年にむけての事業計画を作成し、遂行する

「日本のうたごえ運動」が２０２８年創立８０周年を迎えるのを機に、過去の歴史・教訓に学び、運動のさらなる発展を期し、記念事業委員会を設置し、２０２５年から８０周年を視野においた総合的な発展基本計画（事業・運動指標等）「うたごえ２０２８ビジョン」を策定する。

おわりに

２１世紀に入り日本社会は大きく変容している。少子高齢化や過疎化による地域社会の衰退、労働力人口の減少など、社会基盤は大きく脆弱化している。一方で、グローバル化、ＡＩ化社会の急速な進展により、仕事の質と内容が変化すると共に、格差社会の問題がクローズアップされている。社会の変化は、文化芸術の創造と享受のあり方、人間の生活スタイルにも大きく影響を及ぼしている。今日、憲法を改悪しようとする現政権のもとで、「人、心、いのち」が軽く扱われており、人々の生活の質を高め、社会の活力をいかに生み出すかが重要な課題となっている。このような情勢が激変していく社会にあって、いまほど文化の力が求められている時代はない。

「うたごえ」は、いのちの叫びを歌に込めて、この７７年間、多くの歌を創り出し全国各地で、憲法のこころを歌い、人々の心に勇気と希望の光を届けてきた。その運動を支えてきたのが大衆と専門家との協力共同作業であり、運動は、文字通り「人、心、いのち」を重く、深く扱ってきた。

これらを一貫して守り、育んでいく道が、不戦と平和の道であり、為政者たちが企てているのが、破壊と非人間化のいつか来た道である。この方向に舵をとらせることなく、うたごえ運動８０周年にむけて、一人ひとりが輝きあい、多くの人たちと手をつなぎ、日本中に平和と希望の種を蒔いていこう。

私たち自身が光れば、隣も光り、サークルも光る。その小さな光が集まれば、地域を、社会を、やがて「人、心、いのち」を照らす素敵な世界が生まれるに違いない。日本のうたごえ祭典は、全国から集められた光で希望の灯をともす祭典ともいえる。今年もうたごえの一隅から世界を照らそうではありませんか。

◆２０２５年主な日程　予定

◎２０２５年うたごえの主な日程

日本のうたごえ祭典in神戸・ひょうご　１１／２２（土）～１１／２４（月・祝）

東日本合唱講習会　５／３１（土）～６／１（日）

東日本郷土講習会　４／２６（土）～４／２７（日）

西日本合唱講習会　５／１０（土）～５／１１（日）

西日本郷土講習会　４／１９（土）～４／２０（日）

全国指揮・合唱指導講習会　６／２０（金）～６／２２（日）

創作講習会　３／２２（土）～３／２３（日）

◆２０２４年度表彰団体・個人一覧

表彰団体

【全国協・年間優秀団体】

☆最優秀団体

●佐賀のうたごえ協議会（佐賀）

☆優秀団体

●大阪のうたごえ協議会（大阪）

【うたごえ新聞】

☆ブルーペン賞

●藤村記一郎（愛知・愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団）

☆編集協力賞

●箱崎作次（東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団）

●佐賀のうたごえ協議会

☆通信賞

●青野一男（静岡・浜松センター合唱団）

●小野寺芳子（大阪・ちばりょ～沖縄合唱団）

●河野好行（神奈川・神奈川合唱団）

☆機関紙誌賞

●「マルチャ」（北海道・北海道合唱団）

●「竜頭蛇尾」（福井・福井センター合唱団）

●「くれっせんど」（大阪・関西合唱団）

●「はもらへん？」（大阪・北部センター合唱団）

●「満天星」（岐阜・中津川合唱団満天星）

☆読者拡大賞　（団体）

●大阪のうたごえ協議会（大阪）

●佐賀のうたごえ協議会（佐賀）

●長崎のうたごえ協議会（長崎）

●東播センター合唱団（兵庫）

☆読者拡大賞　（個人）

●藤村記一郎（愛知・愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団）

●箱崎作次（東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団）

●松島正行（大阪・北部センター合唱団）

●西本好道（兵庫・東播センター合唱団）

●須藤智代子（・）

●鈴木勝雄（東京・調布狛江合唱団）

●西本好行（兵庫・東播センター合唱団）

●加山忠（東京・南部合唱団）

●泉和代子（東京・三多摩青年合唱団）

●結城香澄（東京・三多摩青年合唱団）

●壬生明美（埼玉・埼玉東部合唱団レインボー）

●森川恵美子（長崎・新婦人コーラス花の輪）

【音楽センター】

☆ゴールデンディスク賞

●日本のうたごえ祭典ｉｎ佐賀実行委員会（佐賀）

◆２０２４年入退会団体

入会団体

●コール・かるがも（東京）

●座・ばってん太鼓・おどりの会（長崎）

●スターレッツ（千葉）

●ローズコーラス（富山）

●いのちのうた合唱団（京都）

●ＪＡＬ争議団合唱団フェニックス（東京）

●新婦人わかめコーラス（兵庫）

退会団体

●静市９ｐうたう会（京都）
●国鉄東京ＯＢうたう会ｗａｄａｃｈｉ（東京）
●国鉄東京合唱団（東京）
●北九州うたごえ創作合唱団（福岡）
●深尾須磨子歌う会コスモス（兵庫）
●うたごえメイト（埼玉）
●埼玉のうたごえ９条の会（埼玉）
●中村ぞうれっしゃ合唱団（愛知）
●クローバーコーラス（長野）